

一九七七年二月一日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社 発行人 滝野 忠

東京都渋谷区本町六丁目二八の二コーポルタケ谷九〇四 電話 03-337714649

振替 〇〇一〇〇一九一五八四三一 労金 中央労金本店 No.1154163

FAX (03) 329915367

購読料 月額 600円 6カ月前納制

### 〈もくじ〉

#### ■巻頭言

自治体の農林水産関係研究機関のリストラ	2
情熱と闘いで「変革」を	3
―いきいきした労働者運動が改憲阻止戦線の土台(下)―	4
嬉し い 大 誤 算	5
「死に体」小泉内閣に本性あらわ	6
―小泉の関心は天皇と自衛隊だけ―	7
ブッシュのアメリカは戦争国家へ	8
◇Q小における暴力・いじめ事件の経過・続	9
取り戻した四ヶ月と四日	10
いじめ・暴力と闘った親子の記録(上)	11
面 白 い 本	12
小泉内閣の医療制度改革論は改悪そのもの	13
―医療費増高のデマとごまかしを斬る―	14
向坂先生が生きてらしたら	15
読者からのおたより	16

# 旬刊 社会通信

NO. 827

二〇〇二年二月二一日号

二〇〇二年二月二一日発行  
(毎月一日・二一日・三十一日三回発行)

## 自治体の農林水産関係研究機関のリストラ

昨年、セーフガード発動問題、狂牛病と農業が話題になることが多かった。そして今年、雪印食品のラベル貼り替え事件である。消費者からみれば産地表示のラベルなんてもう信用できない、と思うのも当然であろう。また、農業という産業の崩壊が始まっていると実感する方も多いのではないだろうか。そんな情勢の中、自治体の農林水産関係の研究機関もリストラされようとしている。

A県の試験研究機関もここ数年徐々に人員削減が行われてきた。毎年のようにどこかの部所で四月になってみると人が減っているという状況が続いていた。しかし、縦割りされた仕事の中で当該部所以外の組合員の関心はごく低かった。そして、とうとう昨年、農林水産関係のすべての試験研究機関を統廃合するという提案がされた。統合といっても事務所が移転するわけでなく名前のみの統合である。総務部門の合理化をはかるというのである。同時に、試験研究課題を一つ一つ評価し、その積み上げによって業務量を何割削減するという長期計画が出された。この計画により七割削減される部所まででできたのである。

職場の中ではこのことが大きな話題になった。そして、いろいろな議論がされた。「あの研究は必要ないと思う」、「ここがこんなに減るのならあつちにはもつと減るべきだ」などという足の引つ張り合いである。分会は、「情報が入らない」という。情報とは何か。どこの部所がどのように減るのか、どんな組織になるのか、ということだそう。そんなことがわかったときはもう遅い。そして最後まで闘いは提起されず、幹部請負の交渉のみが行われた。最後の最後になって大きな人員削減が提案され、部所によっては管理職以前の元組合役員以外が全員交渉に参加し闘争が盛り上がったところもあったが後の祭りである。

この交渉の最中、横に座っていた農林水産以外の試験研究機関の研究者が言った。「この闘いは君らの負けや、人によって言うことが違う。職場で議論していない。職場の年齢構成、研究機関の将来、そして農林水産業の現状みんなわかってるか。他の研究機関はそういう議論を積み上げ反撃に転じているところもある。このままでは、君らのところは減る一方やな。」結果は案の定である。昨年出された長期計画とは関係なく減らしやすいつころから減らすと言う当局のいい加減さも明らかになった。そして、職場はまた静かになった。

この闘いを通して、私たちはもつと職場や農林水産業のことを考えなければならぬことが明らかになった。あまりにも社会の状況から乖離しすぎていないか。農業がなくなれば研究する意味もなくなる。このことを肝に銘じておかなければならない。研究課題をとってみてもそうである。学位がとりやすい最新の研究をしてみたいという気持ちは分からないでもない。しかし、自治体の研究機関である以上農家のためになる研究を行うべきである。

「研究機関に研究を要望してもまったく採用されない、研究者が自ら提案した課題を自ら採用するようなことはやめるべきだ」、「ある研究者の人に、自分がやりたい研究を農家から要望があったように見せかけるためにあなたから要望してもらえないかと頼まれた」などという声を多く聞く。農業からあまりにも離れすぎて、農家・農業の実態をまったく知らない研究者も多い。専門バカ（昔よく使われた）になりすぎ農業に関心のない研究者も増加している。もう一度足下を固め直して反撃に転じよう。

## 情熱と闘いで「変革」を

— いきいきした労働者運動が改憲阻止戦線の土台（下） —

くずれる企業内組合の物質的基盤 クビ切りリストラ攻撃が荒れ狂っている。失業率は公式発表でも五・六％をこえた。一部を除き、これに抗する大衆的デモンストレーションも大衆的ストライキも組織されていない。またそういう呼びかけもない。嘆きではなく冷厳な事実である。

その原因はどこにあるのか。新自由主義という多国籍資本の運動に対応できずに巻き込まれている。旧財閥はお互いが競い合いながら、日本経済を牛耳ってきた。その分身である企業・事業が財閥の枠をこえ、統合・連携に進んでいる。世界的な競争は財閥解体を生み出すほど激しいのである。合併と分社化、そして空洞化がある。第二に、企業再編成は労働力再編成であり、雇用流動化として首切りを含む「正規」から「非正規」労働者への置きかえが進んでいる。日本的ワークシェアリングの本質である。第三に、当然の帰結として失業の増大と賃金の切り下げである。第四は、この競争を支える小泉構造改革がある。年金、健保、教育などあらゆる部門の切り捨て、地方自治の破壊であるこの動きに対し、日本の労働組合は有効に対応できないのである。

現場の労働者が「いつ辞めたら得か」と希望退職に殺到する姿に顕著である。それは自治労本部の不祥事件のように労組幹部の腐敗・墮落、あるいは右傾化・保守化によって組合員が労働組合を信頼していない現れであるが、その本質は「終身雇用・年功賃金」の正規社員一括加盟の企業別労働組合の存在基盤が崩壊し、企業内モノ取り闘争が成り立たないところにある。そして集团的労使関係の変更を迫る資本の動きは、春闘を解体し、公務員の人事・賃金を規制する人事院制度の見直しまで波及している。日本の労働者の賃金・労働条件を規定する二大装置が奪われ、政府の後押しする雇用流動化策は解雇規制からあらゆる労働基準まで取り払おうとしているのである。

中国がWTOに加盟したが「日本ははたして中国に勝てるか」というキャンペーンがはられ、日本企業の中国進出と共に、中国の安い商品（安い労働力）日本の賃金の二〇分の一といわれる）に対抗する競争が展開されている。労働力の安売り競争であり、人間が文字どおり商品Ⅱ奴隷として扱われる社会である。地域ユニオンへの相談も増えているが、その中味はもはや人権問題である。さすがに組織率の低下にあわて、連合本部も、未組織労働者の組織化、パート労働者の待遇改善を訴えるようになってきた。

**連帯の軸を広げる** このように日本の労働組合は大きな岐路を迎えている。第一に圧倒的な数を占める「非正規」労働者の組織化と産業別統一闘争の強化。第二は資本の海外進出とそれに伴う企業の再編合理化と空洞化に対する労働者の国際連帯と地域衰退に対する企業の社会的責任の追及。企業別組合の企業内闘争からの脱皮である。

労働組合は、資本に対して弱い社会的存在である労働者が、団結という唯一の武器で闘う組織である。この原点に立ち返り、すべての働く仲間が、資本の横暴に対決し、同じ虐げられる人間として連帯の軸を広げる構えを持ち、労働組合運動を大衆闘争として再建することが問われている。

具体的には地域から、反首切り、反失業の共同闘争を作り出す。兵庫では、地域ユニオンづくりをはじめ、「労働法律センター」「労働安全衛生センター」「熟年者ユニオン」「大手産業労働者交流会」「恵泉寮」など様々な経験と組織がある。それらを生かし、相互に

励まし合いながら、「労働相談活動」を全面的に展開することである。

現在の労働情勢では、労働者の訴えは増え、その内容も深刻化しており、相談は団体交渉できる労働組合づくりと直結している。地域ユニオンであるが、それを支える地域共闘（地区労）の組織化、活性化である。共闘による企業責任追及、行政闘争や法廷闘争は、解雇制限など労働者権利法や年金、健保など国民生活擁護の政治闘争と結合する。

労働相談は、職場の日常活動の重要な柱であり、正規・非正規を問わない取り組みは、労働組合運動の改善、強化と結びつく。職場での大衆闘争の強化は時には既存の運動とぶつかるだろうが、条件によっては「民主化同盟」や「新しい労組」の選択もあり得る。そのような情熱と闘いがなければ、連合運動自身の変革もない。

働く者の生活と権利を守る当り前の労働運動が貫かれる時、労働組合は蘇り、憲法闘争となる。地域と職場の大衆闘争の結合は、改憲阻止の大きな流れとなる。

## 嬉 し い 大 誤 算

国鉄闘争がまた一つ新たな段階に入ったなか、国鉄闘争のひろまりを示す嬉しいメルが届いた。まさに運動の「楽しさ」「発展」を示す内容だ。読者とともに喜び、われわれも続くの意志を秘め紹介したい。

（編集部）

私は今、「人らしく」の上映運動に没頭しているのですが、予想通り組織的な壁に阻まれ困難な状況が山積しています。が、現場の人たちは相変わらず温かく日に日に形が出来つつあります。まあ結果はどうであれ、経過を通じてささやかな足場が出来れば良いと思っています。

そうした毎日の中で、今日じつは、私にとって大変な出来事がありました。誤算も誤算、大誤算の出来事です。実は、「人らしく」の取り組みで一番の悩みは「財政難」でした。「金を使わず成功させよう」などと甘い考えを持っていましたが、会議を重ねる毎に目論見は崩れました。その中でも『チラシ』の件は頭痛の種でした。輪転機でざら紙印刷で、と思った私に、仲間は「赤字覚悟でやるべきだ。後々運動的に黒字にすればよい」ときつい一言。結局、ある仲間（一五年間ずっと支えてくれるある組織の教官のプロ）が、まる二日徹夜して原案を作り、彼が常用している印刷会社の人たちと、これまた厳しく吟味して出来上がった『チラシ』は、どう見てもビデオプレスよりも立派な出来です。

立派すぎて、ざら紙の発想しか浮かばない私には、逆に「これはしっかりやらないと大変だ」と、プレッシャーになるほどの出来映えです。さらに、姑息な私の脳裏には「一体いくらかかるのか」。別の悩みが重くのしかかった訳ですが、そこで大変うれしい大誤算が発生したのです。

チラシの出来上がりは六日の予定でしたが、マスコミの取材の関係で、今日ムリヤリ仕上げてもらいました。そして取材が終わった私に一本の電話がかかりました。例の彼からです。「先ほど印刷会社の社長と話してきました。チラシの代金の件ですが、『代金はいらぬ』とのことですよ。何のことやら？戸惑う私に、彼は「社長は言葉で言わないけれど、あなた達の気持ちと闘いが伝わったのでしよう。『立派な上映会をしてください』と言われました」と。最近、まったく良い事がなく、「無理しすぎかな」と、弱気の気持ちも少々あった私にとって、涙が出るほどうれしい出来事でした。とりあえず誰かに伝えたくてメールしました。

（梅）

## 「死に体」小泉内閣に本性あらわ

—小泉の関心は天皇と自衛隊だけ—

支持率は暴落 小泉内閣に自民内の基盤はない、ブレーンもいなければ司令塔もない。というわけで、小泉の頼りは八〇％を前後する支持率という人気率だけだったが、小泉は最悪の条件下で「反自民のシンボル」といわれ女性の人気を独占したジャジャ馬おばさんの首を切つて捨てた。当然のことのように、小泉の人気率は急低下、大暴落。支持率は朝日七二％→四九％、毎日七七％→五三％、読売七七・八％→四六・九％。不支持は朝日一六％→三六％、毎日一二％→三四％、読売一一・三％→四一・六％と急上昇だ。

お笑いは「首切り」事件二日前、日経が社説で「不況下で小泉人氣が続くのはなぜか」と解説してみせていたことだ。四苦八苦しながらの人氣の絵解きは、小泉の「人柄」「指導力」がその一端としながらも、それでは説得力に欠けると考えたのである。和辻哲郎が指摘した「モンスーンの忍従性」まであげつらう。それでもまだ絵解きにはほど遠いと「言葉使い」、「気配り不足」こそが人氣の秘密と持ち上げてみせる。

ところがである。人氣の最大の秘密であった「気配り不足」が、人氣総崩れの原因となつたのであるから皮肉である。さらに「言葉使い」も。というのは、小泉は首切り後、「(シヤジャ馬おばさんの首切りは)誤算だった。一省内(外務省)の問題で納まると思つてしたが、国会全体の問題になった。これが政治の恐いところだ。一寸先は闇だ」と語つてみせた。これがさらに、小泉の政権掌握度と総理としての資質に火を付けた。

経済不安も拡大 「首切り」から一日、株価は一万円を割り込んだ、株価の一万円ワレは昨年の九月一七日以来のことだ。しかし、昨年の九月と今回ではその内容はまったく違う。昨年九月の一万円ワレは同時テロにともなうものだ。しかし、今回は小泉政権への不信が前面に出てきたことだ。

そのカラクリは支持率低下→政権基盤の不安定化→構造改革、不良債権処理の遅れ→金融不安の拡大→経済再生への不安である。「首切り」後、銀行株が下げている。株価の下落は含み損を拡大し、積んでも積んでもふえつづける不良債権をさらにふくらます。金融不安はこうしてさらに強まっていく。

経済と金融への不安は四月一日にせまったペイオフ解禁、それにとまなう地方金融機関(信組、信金、第二地銀)の整理・倒産、額面ワレの建設・不動産関連企業の倒産、さらには逆ザヤにおちいり七転八倒している生保、損保業界を直撃する。こうして株価は下げの圧力が強くなる。

松といつしよに小泉も こうしたなか小泉の施政方針演説が二月四日おこなわれた。演説の内容は①デフレ・金融危機阻止に全力、②二〇〇四年度に不良債権問題を正常化、③税制改革で経済再生の基盤構築といった従来どおりで新味はまったくない。それどころか、今度の「政変」の震源となつた外交機密費等の外務省改革については、「外務省改革を強力に進めてまいりたい」と述べるにとどまっているのだから、小泉政権の求心力は低下するばかりである。

ビックリさせられたのは、小泉の頭に構造改革で苦しみ悩み呻吟している国民に夢と希望を与える言葉が何一つないことだ。それどころか、小泉の目は皇室と自衛隊にだけ向いていることも鮮明になった。

まず愛子の誕生を祝い、ついで不法・違憲に海外に派兵されている自衛隊員に敬意と感謝をささげる。きわめつけは昭和天皇の歌「ふりつもるみ雪にたへていろかえぬ松ぞおやしき人もかくもあれ」をつまみぐいし、国民に艱難辛苦に耐えようと、まるで時代錯誤の訴えをしていることである。歌にくわしいものは、今では「御製」なんて言葉は死語。いったい小泉の歴史感覚はどうなっている。これでは過去の亡霊を再びよみがえさせるだけの強い批判が出されている。

さらに、小泉が日本の実情をまったく知っていないと思われるのは、松は「おたく」もなんもなく、山野の荒廃で今や日本からまったく消え去ろうとしていることだ。西日本ではすでに枯死、東日本でも福島県までは死に絶え、むざんな枯木が山野をおおっている。この松も国立公園内では元氣元氣だ、理由はきわめて単純で手入れしているからである。いま政治に必要なことは、国立公園内の松のように、死に絶えようとしている国民生活に、十分な手入れをすることである。

## ブッシュのアメリカは戦争国家へ

藪に踏み込んだ ブッシュのアメリカが戦争という狂気に向かって突撃を開始した。「対テロ戦争はまだ始まったばかり」「二世紀は戦争の時代」、本当の戦争はこれからだ。どうやらブッシュは戦略を誤ったようだ。九月十一日の出来事は、「警察活動」をその対処策としなければならなかった。ところがブッシュは、全面的な「戦争政策」を展開してしまった。戦争目的が明確でないのである。

戦争は「戦時体制」を国民に強要し、「勝つ」ことを絶対条件とする。「戦争は始まったばかりで、いつ終わるかわからない」というのであるから、ブッシュの仕事は「戦時体制」づくりとそれを可能とする情報操作、さらには愛国心をふくらましつづけなければならぬことになる。ブッシュはアフガン戦争という藪(やぶ)に足を踏み入れてしまったのだ。

一月末から二月はじめ、ブッシュは三つの施政方針を発表した。一般教書演説、予算教書演説、それに大統領経済諮問委員会報告だ。これら三つの方針は、一般教書で国の内外政策を明らかにし、予算教書で予算配分を方向づけ、大統領経済諮問委員会報告で〇三年以降の景気動向をはかり、予算の裏付けをはかるというものだ。

この三つの報告は、「対テロ戦争」を世界的規模で拡大、実践する野蛮な意思と藪に踏み込んでしまったブッシュの混乱で満たされる。

「仮想敵」に宣戦布告 ブッシュは一般教書の四分の三を「対テロ戦争」にあてた。

第一は、テロリスト、テロ国家を絶滅すると、「見えない敵」に戦争布告したことだ。しかし、幽霊とは戦争できぬ、国民の戦争熱にも限界が生じる。というわけで、新たに仮想敵をつくり出した。

その仮想敵とは、「テロリストの地下世界」(ハマス、ヒズボラ、イスラム聖戦、ジャイシエム・ムハマド、それにアルカイダの残兵)と彼らをかかまうフィリピン、ボスニア、ソマリアといい、戦争のよびかけに答えなければ、「米国が(単独でも)行動する」と脅迫する。

さらに第二の仮想敵として朝鮮民主主義人民共和国、イラク、イランを名指し「悪の枢軸」とレッテルをはる。この三国はミサイル・核など大量破壊兵器を開発し、テロを輸出

しているからというのである。

「テロの輸出」だつて？ これはかつてどこかで聞いたことである。キューバに一九六〇年以降投げつけられた「革命の輸出」との言葉である。一九六〇年代以降、いやそれ以前からアメリカは中南米諸国に民主的・民族的な政権が樹立されるや、「革命の輸出」を口実に、軍を派遣、宣戦布告なき戦争で中南米諸国の大衆、労働者、民主的政権を血の海に沈めてきた。これと同じことを、二一世紀には全世界で実行するとの宣言である。

**膨脹する軍事費** 第二は、そのための戦争資金づくりだ。ブッシュによればアフガン戦争に毎月十億ドル、毎日三千万ドルを要しているという。戦争開始からすでに四カ月、数十億ドルがアフガン国土を破壊し、人命を殺傷するために費消されたことになる。ところがそのアフガニスタンではたった四千五百ドルの国連への分担金が支払えない、さらに数十万ドルにも満たない公務員賃金も。まさに戦争の狂気を示す一端である。しかし、ブッシュは「見えない敵」からの防衛の柱は「本土防衛」だと戦争予算を提案する。

軍事予算の総額はなんと三千七百九十三億ドル、円にして五十兆八千億円にのぼる。今国会で審議されようとしている日本の〇三年度予算の一般歳出四十七兆五千四百七十二億円を三兆円余を上回るものすごい数字である。日本の軍事費は約五兆円であるからじつに十倍である。ブッシュは敵を打ちまかすには高価な精密兵器が必要、それは罪もない人たちの生命を助ける、だから「こうした兵器がもつと必要」というのだ。

この結果、軍事予算は前年比四百五十億ドルの一四・五%増大し、過去二十一年間で最大の伸びとなった。この他、エネルギー省が管轄する核兵器関連予算をふくめれば三千九百六十一億ドル(五十三兆円)であり、日本の一般歳出にあたる裁量的予算は七千四百六十五億ドルであるから、その比率は五三%強となる。

**情報操作** こんな軍拡予算はITバブル破裂で下降局面に突入した経済状況下、減少する税収、十年間における一・二七五兆ドルもの減税政策とが相まって国家財産を直撃せずにはおかない。ブッシュは大統領になってから今後十年の財政黒字は五兆六千万ドルになると予想した。

しかし、当初予測はITバブル崩壊で初年度ですっかり狂ってしまった。〇二年度の財政収支は一千六十億ドルの赤字となった。今後、戦費は増大しつづけ、景気はエンロン、Kマート、IT関連企業の大倒産に示されるように、よくなるとはいえない。そこで心理戦、情報戦が展開されることになる。

景気、赤字財政の深刻化を避けるため、FRB、FOMC、CEAの経済報告が微妙に変化させられていることだ。二〇〇二年度の第一・四半期のGDP伸び率が〇・七%になったことによる、「景気は底うち」の過大宣伝である。当初マイナスが予想されたことがプラスになったことで安心感が増幅させられたかのようだが、〇三年一月の消費支出、自動車需要が六・七%減退は、ローンのゼロ金利による需要先食いであったことが明らかだ。

バブル破裂はエンロン、そしてKマートの倒産という新たな段階に入った。この背後には日本と同じ投機による不良債権の天文学的増大がある。株価はナスダックは最高時の三分の一から二分の一を行ったり来たり、ニューヨークダウは一万ドルをウロウロしている。アメリカ経済のエンジンが点火したことを示す指標はなにない、GDPがマイナスに転化しないのは軍需を中心とする財政ばらまき以外の何物でもない。

こうして、ブッシュのアメリカは「見えない敵」との全面戦争下、世界の経済・政治状況を新たな段階へと導いていく。

◇Q小における暴力・いじめ事件の経過・続  
取り戻した四ヶ月と四日

いじめ・暴力と闘った親子の記録(上)

はじめに＝これまでの経過・教訓

怪電話 昨二〇〇一年一月二日、夜遅くに「カウンセラー・オガタ」と名乗る中年男性より自宅に電話がかかってきました。

「イナモリさん(ママ)は要請書を出されたでしょう」(Q小学校校長とO市教育長宛)と。最初の頃の「経過報告」も入手していて、どこから手に入れたかとか、誰からうちの電話番号を知ったかとか、(オガタの)住所、電話番号を聞かないとすまないというのなら電話を切ってもらっていいという。「カウンセラー」を名乗るのがみそで、とりあえず怪電話を聞いてみた。

- ・ いじめは社会の仕組みや大人社会にいじめがあるために起こる。
- ・ 無理するな。不登校の子のセンターもある。
- ・ 登校をあせるな。担任が変われば解決することもあるんだから。
- ・ みんなや親にもせめられ、そういう目で見られ、いじめたほうがかわいそうなんだ。
- ・ 学校は権限があつて強いですよ。子供に仕返しもされるし。

おおむねこういう内容でした。最初のくだりなどは私ならうなずくだらうというような、いわゆる利いた風な話で、だんだん誰の回し者かわかってくるような話、それでもつべこべ言うとは最後はおどしで、三十分の電話でした。

クラス替え 去年夏休み前、甲(いじめの被害者)の小学校三年一学期末に起こった事件で、二学期初日・九月一日に発症してから、地元Q小の保護者の方をはじめ、全国の本当にたくさんの方々にご心配いただき、親切なアドバイスや励ましをいただきました。本当にお礼の言葉もあります。しかしわりと自身の子供さんがいじめられた経験がある人(予期していた以上に多かったのですが)などが、「カウンセラー・オガタ」のようなご意見が多く、「だから闘うな、要請書まで出して」と言う感じです。こんな詳細な経過報告書に至っては、言葉もないという風でした(もちろん経験者の中にもたくさん心配してご援助いただいた方が居られるの言うまでもありません)。

今回の二〇〇二年一月四日までの、四ヶ月と四日にわたるいじめ・暴力事件との闘いの意義があるとすると、一つにはこういう「オガタ」のような意見に惑わされず、決して「少人数授業・クラス分割授業」などに妥協せずクラス替えを実現し、二つにはこれも途中で妥協せず教室の物理的引き離し(三年生は二クラス)を勝ち取り、三つには担任教師の変更も出来たことです。

学校長はクラス替えを「異例中の異例」と言い、O市教委担当者は「今まで聞いたことがない」と言っていました。S県内の教員の友人も、近畿で今回の件をいろいろ心配いただいた教員の方々も「年度途中のクラス替えなんて聞いたことがない」と言います。ましてや教室の引き離しなどは例がないでしょう。

昨秋、いろいろと甲の件で要請・交渉している最中、小学三年とは思えない女子児童へのひどい悪質な差別・いじめ事件が同じクラスで発生しました。これも含め、事件の根本的解決に向わせる引き金となったと思います。



**新たな問題** また今回の問題解決にあたって、私自身は（甲の幼稚園時代にもいじめ事件はあったものの）初めての経験と言ってもいいようなものでした。だが新たな問題として、一つには「いじめ」の定義の問題がありました。担任や校長・教頭は「複数で、長期にわたって、陰湿で——」と言うような古い定義しか知らず、今回の事件をいじめと判断していなかったと言うことがありました。私どもが勉強して〇市教委に行くことと直ちに認定し、小学校を指導してくれました（それでもしばらくは「いじめられた方がいじめだと言ったらいじめになるのでいじめだ」ということのみを強調する、返す刀で「いじめ」を軽く輕いものとして扱い、歪曲すると言う態度でしたが）。

二つには新しい子供の心の病と言うことです。PTSD（心的外傷後ストレス傷害）には潜伏期間があり、また幼稚園時代にも同じS（甲をいじめた子）からいじめ・暴力を受けて、衣類を通した三回の鉛筆刺しという残虐な被害はうちの甲だけということ、複雑な面もありました。が、いろんな事件が発生し、連日の新聞を見ているとPTSDについての理解は急速に深まる今日の社会の状態のようです。

いずれにしても県教委などに行った直後の段階などで、「対処療法はすぐ出来るだろうが」と、私が報告した方からご意見があり、「むしろそつから先の）根本的問題（民主的教師集団・子供集団づくりなど）の解決が難しい」と言われたりしましたが、その「対処療法」がなかなか実現せず、年末年始も含め悪戦苦闘しました。

甲にとってハード面での条件整備にすぎず、「急性ストレス傷害」が治癒・回復し原状復帰していくには本年一月七日からの「第二部、事件、その後」の経過をたどり、現在進行形です。これからも別のレベルでの、新たな問題に親子で取り組んでいかねば”根本的解決”完治ははかれないと思いますが、多面的なご指導・ご鞭撻をお願い致します。

### 暴力・いじめ被害者を教室から追い出す？担任教師

二〇〇一年一月二七日（火）

一、朝八・二〇Q小学校着、甲の父乙・母丙・甲（いじめ被害者）の三人で職員室に行き、登校したことを校長に伝える。職員室から出てきたS（いじめの加害者）と会ってしまふ。甲は三年一組の教室で三ヶ月ぶりの朝遊びと朝自習の時間を過ごす。授業のチャイムが鳴り担任K教諭と教頭がSを教室に入れようと連れてきた。

結果、Sは甲の父乙の理のある説得で教室内には入れなかった。が、甲の父親が聞いた「五校時目の保護者参観時の甲の授業（少人数にはなっていないので）を受ける権利の質問」にまともに答えない担任K教諭のため廊下で押し問答になり、一校時目は代わりの教師が絵本を読んで終わる。教頭・担任K教諭は体の大きい男性教員をボディガードに連れてきて、甲の父親を威圧する。

担任K教諭・教頭は三ヶ月間毎日授業を受けている加害者Sを教室に入れ、三ヶ月ぶりに正規教室（少人数でない状態）に戻った被害者甲を教室から追い出そうとした。甲の父母はその前日校長に届けていた診断書と注意書きに従って同室させないよう求め、それを否定でききれなかった教頭は他の教師に命じてSを別室に連れて行く。

その後廊下での話し合いとなったが、「（Sによる鉛筆刺し事件の）証拠でもあるのか」といまだに甲の父親にくっついてかかり、「小集団をしているのは教育的配慮だ」とどなる担任K教諭の大声でうるさかったが、教室内の甲の母親が窓もすぐ閉め、代わりの教師も絵本を携行して来ていて直ちに授業を進めたのでスムーズに授業は進行した。甲は最初の担

任K教諭・教頭の妨害にもかかわらず、ストレスを生じるトラブルの相手Sさえいなければ全体の正規授業を十分受けられることを示した。

「少人数授業から全員のクラス（Sもいる）の場へ甲に慣れていってもらう」、などいう校長・教頭・担任K教諭の説明・やり方のまやかさも証明された。また乙の正論に従い、一時間とはいえSを同席させない元の教室を作ったことも大きい。

一校時が終わり、甲は両親と共に県教育長要請のためいったん外出した。教育長も県学校教育課長も「しかとお預かりし対処します」と返答していた。

二、五校時目保護者参観時、朝、Sと会ってしまった甲は、頭痛を訴え欠席。授業は急に社会が小教室（三年一組を二分割）の国語に変わり、詫び状が三年一組前に貼られていた。

三、朝、校長が前日甲の父親が提出した注意書きが信用できないと、診断書を書いた医師に電話するとの事だったので、結果を聞きに甲の父母乙丙が校長室に向かう。校長室にはカウンセラーI氏と校長、Sの母と巨漢の丸坊主の男がいた。廊下に出てきた校長と乙・丙が話していると、Sの母の兄だと言うその巨漢の男は、丙を不気味な目でにらみつけて出入りし、丙は恐怖におののいた。校長は医師から、「甲とSを同じ教室においてはいけない」ということを確認したと言った。

四、一四・五〇～一七・〇〇 三年全体の保護者懇談会（四七人と教師）と三年一組（一五人と教師）のみの話し合い。いずれもPTA主催なのに納得いく説明ないまま従来のPTA学級委員が司会をする方式をとらさず、担任K教諭など教師がみな進める。

「朝、教室の前で甲の父親ともめ、その話をSに聞かせたくなかったのでSを教室に入られなかった」（甲の診断書・注意書きにしたがってSを甲から遠ざけたのではないという方便、押し問答はSを出させてからのことなのでこれはウソ）、「甲のために少人数授業が増え、他の子どもたちにとっても迷惑をかけている」「今日の参観も甲が出席したいと言うので急に小教室にした」という担任K教諭の説明と司会進行のため、他の親からも「おかしい」「うちの子も疲れている」という意見が出されてしまい、混乱はすべて乙のせいとされる。ただ、その懇談会の中で、この間もSが同級生に暴力をふるい、さすがのSの母とSも、その家にあやまりに行かねばならないほどの事件もあったことが判明した。

五、一七・五〇 自宅から甲の母丙が校長へ電話。

「他の子どもたちを苦しめるのは不本意なので、少人数授業を直ちにやめて欲しい。甲を学校にやるのはあきらめる。もつと早く原因のわかった時点で、校長がきちんとした対応をしていたらこんな事にはならなかったので、とてもくやしい」と話した。

一月二八日（水）一九・〇〇 自宅ポストに学級だより等が入っていた。昨日ただちに少人数授業をやめて欲しいと話したのに、この度の学級だよりのままでは私たちの他の子どもたちを苦しめたくないという気持ちは、他の保護者に伝わらない。いつまでも甲のせいで、他の子どもたちを苦しめていることにさせられる。担任K教諭・教頭・校長の悪質さ（「おわび致します」「何卒御協力御理解をよろしく」）が伺える。

甲は小集団を望んでいない、クラスみんなの教室を望んでいる。障害さえなければちゃんと戻る実績もきのう示した。校長は診断書発行の医師に電話し、同室がだめだと言うことを確認しているのに。

## 新たな悪質ないじめ・差別事件発生

一二月三〇八日の週―小集団・小教室授業がなく「休止」したとのこと(県教委には「やめた」と報告していたが)

理由は、三年一組女子児童Aさんを「くさい」とかと言って、多くの女子児童で(若干の男子も参加―一二月一日夜のこの件の関係保護者懇談会にSの母も参加)いじめていた事件を担当が気づかずに来たが発覚し、四時間の「道徳」の時間を設けて話しする必要が生じたため。トイレにAさんを連れて行き、(いじめられていることを)言うなよと口止めまでしていたという。後に、校長も「首謀者は三人で、Aさんとクラス替える必要がある」となったものである。

### 市教委の謝罪と学校長の責任の確認とSへの個人授業の指導

一二月一日(火)一六・〇四―一八・五二 Q小校長室で、市教委・T主幹・A主事とQ小・校長、そして乙・丙・乙の友人Bさんと、話し合いがもたれた。

※一二月二七日(火)の県教育長要請以来、二八日(水)には県教委がO市教委を呼び出し、二九日(木)には県教委とO市教委でQ小学校に行つて事実を掌握し、Q小を指導した。その中味は「診断書について、乙に断つて医師を訪問し、帰ったら乙に報告して、具体的解決策を乙と協議せよ」とのこと。

しかし、乙に無断でCクリニックを校長が訪れ、乙に知れて質問されると「校長個人の診療に行つたのでプライバシーなので中味は言えない」というとんでもない話し。乙には「甲君の具合はどうですか」という電話が二度ほど養護教諭から入っただけで、およそ「解決に向けた協議」などない。県教育長が対処を約束されてからだいたいどの進展もないとはいかがなものか、という乙の問題提起で一二月六日(木)乙親子三人と県学校教育課長の話し合いや県教委と市教委の課長間会議(一二月七日)などもたれ、ようやくこのような正式な場の設定となった。

市教委主幹からの謝罪 夏休み終わつてから話を聞いていたのに、なかなか解決できず申し訳ない。県教委からも指導があった。

① 三年のクラス編成は、幼稚園からのことが配慮不足だった。申し訳ない。謝罪する。  
② 九月から甲君がストレスのため学校に来れず、初期対応充分でなく、反省し深くお詫びする。

③ 学校、管理職、担任が乙さんの気持ちを汲んだ対応をせず、特に懇談会の持ち方が配慮なく、校長・担任等指導しきれず、責任を感じている。

④ 市が積極的にこういふ場に出てこなかったことで、誠意がないということになり、これからは積極的に出てきて解決を図りたい。

校長の確認事項 ① 幼稚園時代からの引継ぎ―履行せずお詫びする。② 鉛筆刺し事件は暴力事件だ。―加害者―被害者と呼ぶことも確認。③ いじめ事案か―数回にわたつて認定。④ 専門医の診断書の中味を尊重する。甲君が一日登校して帰るまで完全に「同席など」から離れる状況となつていなかった。

・一・二・三―乙の了解を得て(Cクリニックに)行ったものではない。(市教委も)申し訳ない。

・二人を仲良くしていったらそれでいいんや」という考え方で流していった。診断書を無視している。

・きのう担任K教諭が乙宅で「私は直接Cクリニックの先生から話を聞いていないので」

と言った事―発言として適切でなかった。

⑤ 学校の運営・行動のとり方の反省―少人数授業は保護者から「乙の提起でうちの子がとばっちりを受けている」と言うのが出て、学校が増幅している。甲は「学校に今すぐにも行きたい」と言い、加害者側の子以外とは充分遊べると言っている。まず被害者の立場に立ったやり方をとるべきで、それがないので一部保護者に誤解を与えている。

加害者本位の運営でなく、暴力・いじめ事件であることを相手の子どもにしっかりと、親にもおさえること。甲だけが五時間受けなくていいとはならない。今、どちら側に不利益が与えられているか、少人数・保健室登校など、考えてみてわかる。

### 自然登校ができた

その謝罪・確認をふまえて、会議全体の結論として、喧嘩両成敗的な立場でなく被害者の立場に立ち、三学期につなぐため甲の自然登校ができる体制を学校が市教委の力も得ながら体制作りをし、二学期の残りあと数日、加害者の保護者に保健室登校などを指導し話することとなった。

結果、加害者Sの父親に校長・市教委がその晩話をして「個人授業は断る。甲には少人数授業を受けてもらったらいい。」との断りの返答を校長が受け、〇市教育長の「二人はブロックして離しておくように」との指示を受けて、一二月一四（金）、一五（土）、一七（月）～二〇日（木）の三年一組と二組をそれぞれに分割して組み合わせ、甲とSを分ける授業、隣室にも加害者がいない状況を朝一番からつくることとなり、二一日（金）の終了式を含め実施された。

甲は保護者つきそいでではあったが、また一日三校時くらいまでであったが、一九・二〇日の純粋のはやりカゼでの休み以外、終了式を含めて五日間、実に九月一日来二学期初めで三ヶ月二週間にして朝一番からの自然登校ができた。  
(つづく)

## 面白本

じっくり腰を落ちつけ精読する書籍が少なくなつた。週刊誌はビジュアル化、月刊誌は百科事典化、文庫は風俗化、新書・単行本はハウツー化、政府文書はマンネリ化というわけで、書架から「ほこりにまみれる批判」をうけていた古い古い本を引っ張り出しては読んでいる。いずれも二〇〇〇年前前に読み、わかつたつもりでいた本である。

最近手にした本は『韓非子』（中公文庫、二巻）、『莊子』（岩波文庫、四巻）、『論語物語』（下村湖人、旺文社文庫）等、中国の古典が多い。これは正月休みに永井荷風の『断腸亭日乗』（岩波文庫、二巻）に、彼の表現力の多彩さが漢書に負っていることを教えられたからだ。同時に、「世相の乱れ」と「文化人の精神的頹廢」を嘆いていることで、やはり精神的格闘には古典の再読こそ必要と。

クラウゼビッツの『戦争論』（岩波文庫、三巻）のほこりも払った。戦争の本性、戦争の理論、戦略一般はアメリカの「新テロ戦争」と対比すれば面白い。とりわけ、戦争において重大な要素として「戦力」に兵士の資質と精神力、これを指揮する指揮官の任務がきわめて大ききことをあらためて教えられた。労働運動は一種の戦争だ。資本家と労働者階級の。新たな労働運動の指揮官はいかになければならぬか、考えさせられるところが多い。

乗り物の中では『さまよえる湖』（岩波文庫、二巻）、『東方見聞録』（東洋文庫）、森鷗外の『知恵袋』（講談社学術文庫）、ハイネ詩集『歌の本』（岩波文庫、二巻）等を手にし、今は小泉や自民党がどうつぶれていくののだろうかを問題意識に『平家物語』（岩波文庫、五巻）を持ち歩いている。

机上にはエンゲルスの『家族・私有財産・国家の起源』（岩波文庫）とハンチントンの『文明の衝突と21世紀の日本』（集英社新書）がある。文明そして文化の概念を新たに考え直したいというのが問題意識である。  
(滝野記)

## 小泉内閣の医療制度改革論は改悪そのもの

— 医療費増高のデマとごまかしを斬る —

医療費の高騰により医療保険が危機的な財政状況に陥ったというデマ

医療費が増高したことにより、健保財政が危機的な状況に陥り、とりわけ老人医療費の増高が著しく、このままでは医療制度が破綻してしまう。したがって、医療制度改革を早急に行わなければならないという議論は、為にするものであり、二重にも三重にも誤魔化しがある。

マスメディアを動員して、このようなキャンペーンがはられているが、そのような宣伝・煽動に惑わされないためにも、これに若干の批判をしておきたい。

### 現状認識

日本の医療制度は、医療の質やその平等性から、世界第一位と評価され、健康指標、平均寿命、保健医療どれをとってみても、世界最高水準にある。このことは、社会保障の先進国に学びながら、医療保障制度の拡充に、努力を重ねてきた成果であると言える。

したがって、医療制度改革すべきところが、まったくないとは言わないが、小泉内閣の言う「改革」は、改革の名に値しないものであり、医療制度の破壊、医療保障制度の後退を企図する、医療制度改革と言わざるをえない。

### 三方一両損？

大工と左官との三両の金をめぐってのトラブルを、大岡越前が自らの懐の一両を加え四両として、それぞれに二両ずつ与え円満に解決したという、大岡政談をもとにした落語の一つであり、ユーモアのある誤魔化しであり、笑い話である。

小泉首相の言う三方一両損は、誤魔化しの上に誤魔化しを重ね、かつ、その方向性が逆さまである。それは、社会保障費の当然増が一兆円見込まれる現状にあり、その当然増の理由は言うまでもなく、高齢化の進展によるものであるが、その一兆円の当然増を、七千億円に圧縮することを政府として決定した。その三千億円の負担を、医療制度改革と称して、医療機関、保険者、患者に押しつけるものであり、三者に負担を分担させたことを三方一両損とは言わない。本来は当然増として、政府が財政負担しなければならないものを、三者に犠牲転嫁したにすぎない。

さらに、三者とはいうものの、保険者の負担増が、被保険者の保険料負担増、給付の切り下げとなることから、結局は患者、国民の負担増となる。

また、大工と左官のトラブルは、落とした金、拾った金であり、それぞれが受け取れないというトラブルであり、小泉内閣の「ツケまわし」のような下品なものではない。

### 健保財政の危機の原因

健保財政の悪化は、老人保健拠出金、退職者医療拠出金がその原因であり、その拠出金が増大し、保険料収入の三分の一を超える健保組合もできている。

健康保険組合が負担する老人保健拠出金は、実費の数倍になるような調整率が課せられており、退職者医療は「国保の被保険者」であっても、その医療費の費用負担は、当該の保険料と「健保からの拠出金」で賄われることとなっている。

この制度の大義名分はそれとして、この制度をつくった狙いは、裕福な健康保険組合に大きな負担をさせることであり、政府の財政負担を、直接的、間接的に軽減することが目的であった。したがって、健保財政は当然のこととして赤字になり、積立金を取り崩さなければならぬ状況になるのは、必然であると言える。

### 医療費の増高、とりわけ老人医療費の増加が著しいという宣伝

国民医療費が三〇兆円を突破し、老人医療費が一〇兆円を超えた、一割の老人が三分の一の医療費を使っている。二〇二五年には二割の老人が、過半の医療費を使うことになる、センセーショナルな報道がなされているが、これも、為にする扇情的な宣伝と言わざるをえない。三〇兆円という医療費が本当に高いのか、高齢者人口が急増しているなかの一〇兆円が、著しい増加なのか、十分な検証が必要である。

### 社会保障費

社会保障給付費の対国民所得比は、国立社会保障・人口問題研究所の直近の速報でも、二〇％には達せず一九％台であることが発表されている（一九九九年七五兆円一九・六〇％ 一九九八年一八・八八％ 一九九六年一七・三八％）。

国際比較では、先進国のなかで社会保障が最も貧困といわれているアメリカよりも小さく、ドイツの二分の一、スウェーデンの三分の一程度であり、日本の社会保障費が、二倍増・三倍増してやっとなら西欧・北欧なみとなる。さらに、その社会保障費に対する国庫支出も対GDP（国内総生産）比三〇四％台で推移しており先進国のなかでは最低である。

### 国民医療費

国民医療費が三〇兆円を超したと言われているが、国民所得に占める割合は、この間七％台で推移している。日本の医療費は、医療関係労働者の劣悪な労働条件などから、かつて高い医療費とはなっていない（直近の集計で八・一％ 三〇・九兆円）。

国民医療費の対国民所得比の国際比較では、アメリカが二二％台、フランス二一％台、ドイツ一〇％台、イギリス七％台となっており、日本はわずかだがイギリスを下回っている。この対国民所得比は、各国とも漸増傾向にあり、アメリカの伸び率がやや大きい、ここ二〇年ほど同様の傾向にある。長年にわたって医療費が増加しているのが、先進国といわれる国の全般的な特徴である。

### 総医療費の国際比較

OECD加盟二九ヶ国の総医療費の国際比較では、対GDP（国内総生産）比は、七・二％で二〇位であり、一人当たりの総医療費は二三七八ドルで七位となっている。（直近の速報では、それぞれ七・四％ 一八位 一五位となっている。）

各国の対GDP比と一人当たりの総医療費は、アメリカ一三・九％、四〇九五ドル。ドイツ一〇・七％、二七三三ドル。スイス一〇・〇％、三六二〇ドル。フランス九・六％、二二八六ドル。カナダ九・二％、一八三二ドル。スウェーデン八・六％、二二一九ドルなどとなっている。

### 税金の使い方西欧・北欧なみに変えれば改善できる

国民所得が最近あまり伸びないなかで、ここ十年間の国民医療費が対前年度比平均

四・六%の伸びであり、老人医療費が平均七・八%の伸びであることから、老人医療・医療制度の改善を政府は企図している。しかし、社会保障費への国庫支出を先進国なみに増額すれば、また、高齢化の進展による当然増の社会保障費を、政府が財政負担すれば、改善ではなく改善することができると。

(原 義弘)

## ◇ 読者からのおたより ◇

そのうちに 一度投稿したのですが、読むに耐える文章が書けるよう訓練しないといけません。そのうちに…。(徳島・H)

編集部より 文章は恥をかくこと。習うよりは慣れるが大切。投稿よろしく。  
職場の闘いこそ わたしたちは、「民営化」とは、事業のあり方を資本の論理に全面的に委ねる事であると考えています。そこで何より優先されるのは、利潤の追求であって、JRやNTT、あるいは新自由主義施策によっていち早く民営化された欧米の企業の例などを見てもわかるように、採算が第一、公共性や安全性、そこで働く労働者の権利などは度外視、ないがしろにされるのが実態でしょう。もちろん、郵政をはじめ日本の「国営事業」にもそうした実態があるのは事実です。しかし、それは、「国営事業」に対する人民的な管理が貫徹できていない結果であって、そうした管理システムが制度的に保障されていない「民間企業」との間には決定的な違いがあると考えます。政府や独占資本が新自由主義にもとづいて、「規制緩和」や「民営化」を遮二無二推し進めるのも、そのためにマスコミと一体となって「官」批判、「官僚」批判を展開するのも、資本のやりたい放題・勝手放題を縛っている諸制度をなくしたい、取っ払いがためではないでしょうか。腐りきった労資関係を絶つ作業もいかに困難であっても、職場の闘いなしには労働者が心地よく働くことができない職場は実現しないと考えます。(京都・R)

誌代です いつもお世話になりありがとうございます。誌代おそくなり申し訳ありません。半年分、誌代です いつもお世話になりありがとうございます。誌代おそくなり申し訳ありません。半年分、ここに oversent いたします。(東京・T子)

編集部より ご送金ありがとうございます。新しいお仕事の方うまくいっていますか。いつ出される？ 職場では「メンテナン合理化」を目前に控え、毎日「いつ出されるのか？」という状態です。強制出向や配転等により下請会社のU社が予想されています。仲間の間では職場も組合も「U」(なんと同じ名称です)だという冗談話まで出ています。(国労上野・SS)

編集部より どこもすさまじい合理化。どうしたかうと、どこもさくさく。前号の京成労組は参考になると思います。

継続購入で支援 はじめ介護保険記事で購読出発でしたが、諸々の力いただき私のできる支援は継続購入で。母の遺言となった「生命ある限りがんばりましょう。実践あるのみ、おかげさまで生きているだけで素晴らしいだね」運まきながら娘の口から聞かれた新年でした。(茨城・W子)

編集部より 嬉しいお便りに感謝しています。茨城にうかがう時が楽しみですよ。(埼玉・T)

編集部より 私どもは相変わらず。世相にいらいらしていますけれど。ご多忙のごようす。ご自愛を。お医者さんが過労で倒れたんじや、患者は安心できませんもの。(長崎・N)

残念 私力の不足で一部減りました。元の部数に戻すよう努力します。編集部より ご多忙な中での取り扱いに感謝。事態が好転する兆しはまだありませんけれど、初志貫徹めざしががんばりましょう。

戦線をこえて 歴史の歯車が逆回転を初めています。自衛隊の派兵・有事法制の制定・改憲の実現化と枚挙に暇(いとま)がありません。そして、日本労働運動再建の基軸である国労運動の混迷と国労の闘いの歴史(分割民営化による)は私の人生の十四年間の歴史と一緒です。さまざまな攻防を乗り越えてやってきた苦労は条件は違えども同じ。戦線を整え反撃に転じて欲しいもの。今こそ高らかに「反戦・平和と民主主義を守ろう」と。(広島・T)

編集部より 国鉄から他職場へのあなたの十四年間。それだけに今の国労の状況を思ってお気持ちの思うと… 自覚した国労組合員は乗り越えてくれると、私は確信しています。  
友人の死 ニューヨークのテロと同じくして、古くからの友人が突然にしてこの世を去りました。同じ時代を共に生き、国鉄家族会の同志として励まし合ってきた彼女の死は、埋めようのないほどの大きな衝撃です。仲間を失うことの辛さを感じています。

闘いの行方 見ずして逝きし友 首を切られし夫(つま)を残して (佐賀・N子)  
編集部より 私も過日友人を亡くしました。学生時代からのつきあいでした。とりわけN子さんの場合、私どもとはまた違うでしょう。まさに「戦友」でいらしたわけだから。

国民投票案粉碎 年末、来旭ご苦労さまでした。体調もなんとか回復、目下二月一日「憲法を生かす会」定期総会に向けて準備に励んでいます。国民投票案粉碎に全力投入です。(旭川・N)

編集部より 二月一五日から北海道に行きますが、旭川には寄れません。原稿よろしく。

「国労冬物語」上映運動 三月二四日、キャンパスプラザ京都にて「人らしく生きよう 国労冬物語」の上映委員会を立ち上げ、成功させようと取り組んでいます。京都コンピュータ解雇撤回争議も二月一三日、大阪高裁での「和解」交渉が最後になり、再び闘う体制を作らねばと取り組んでいます。(滋賀・N)

編集部より 上映運動、全国で強力にとりくみ活動が進んでいます。東京の上映会(二月一六日)にはわが事務所は全員参加。京コンの仲間、みなさんお元気? よろしく。  
多忙になった 引き続き購読させてください。小生もまた多忙になりました。(山梨・S)

編集部より ご活躍のごようす。課題いっぱいありますものね。

会社はアライ作り N T Tはたいへんな状況です。五十歳以上は退職・再雇用です。会社はそのためのアライ作りに必死です。(大分・S)

編集部より 毎日の新聞にも合併、倒産、統廃合、人減らし・賃金カットの記事がのらない日はありません。まず仲間と集まって、目標決めて、行動してみてよ。

組合強化 労働運動をどう強化するか。連合に「雇用も賃上げも」要求させること。そのため各労組が賃上げ要求をするよう運動し、労組間の交流を実態に根ざして行うこと、とそんな風に感じています。(静岡・S)

編集部より 私もいろいろ考え、問題意識もつてます。一度、勉強会やりましょうよ。

掲載に感謝 家族の思いをひろめていただいていたことがとうございしました。闘いも厳しい状況ですが、夫の人権を取り戻し、元の安心できる生活を取り戻す。そのためにももうひとふんばりです。社会通信を通して皆様の大きな力をいただき、私もがんばります。滝野さんもお身体に気を付けてネ。

(藤保美年子)

編集部より 題名は過激ですが、いまクラウゼビッツという人の「戦争論」という本を読んでいます。闘いには人間的要素、精神力がたいへんに大事なことに改めて気付かされました。

忙しくて! 誌代が切れてしまっているのに「通信」を送り続けて下さりとても感謝しております。副業も始めましたので、どんなに遅くても二月十五日以降、今度こそ誌代をお送り致しますので勝手言ってしまうて申し訳ないですが、今しばらくお待ちいただければと思います。(埼玉・O)

牛肉 狂牛病の牛が発見された時、酪農家のいいわく、人間が利益のために作られた病気だ。それは牛は草を食べるのに、太らせるために肉骨粉を草に混ぜた、牛は草といっしょに食べるしかない。国の無政策によって、私は牛肉買えない症になった。(北海道・K)

編集部より 我がつれ合いもまったく同じ。狂牛病発生以来牛肉はむろん、家畜の肉はいっさい買つてきません。キリギリス生活です。肉屋の社長の嘆くこと。我々店主はいっしょうけん命、いい商品売ろうとしているのに、大手はと。雪印に怒りが向いています。

## 向坂先生が生きてらしたら

世の中、様変わり。総評や社会党があった当時の思考と行動ではなかなか活路は見いだせません。階級闘争という「戦争」には勝てません。まさしく「一」からの再出発だと思えます。どうせ「一」からの出発であれば、何者にも縛られない新しい(古くからの原則を新時代に適応させた)発想での組織づくりも、作り手としては楽しいのではないかと思つています。今後は日程が許すかぎりいろんな集まりに参加し、仲間と議論を交わしたい。人の意見を聞くことも大事ですが、それにたいする己の意見もぶつけ合いながら、共に成長したいと考えています。

最近もう一度体系的な学習をせねばとも考えます。といいますが、私はこれまでの貯金と感性で運動を続けてきましたが、それももう限界かと感じているからです。今の労働運動は私が本で学んだ学習の領域をはるかに越え、未知の領域のような気がしています。

こんな事をいうと向坂の親父は「貴方の学習不足だ」と雷を落とすでしょうが、雷も今はなつかしい思い出です。とにかくさまざまな学習の中で、今の闘いを切り拓いていかねばと痛感しています。(G)